論　文

ポストオフィスタワーを巡る２つの英国小説
― アイリス・マードックの *The Black Prince*（1973）と イアン・マキューアンの *Saturday*（2005）を比較する ―

中　窪　　靖

序論

本稿は、二人の英国作家の作品、アイリス・マードックの *The Black Prince*（1973）とイアン・マキューアンの *Saturday*（2005）を比較することを目的とする。これら２つの作品にはいずれも、ロンドンのランドマークであるポストオフィスタワー（現・テレコムタワー）が登場する。後者のマキューアンの作品の Vintage Classics 版に至っては、作品の表紙にこのタワーが描かれ、この作品の内容を象徴させていると読むことができる[1)]。

マードックの場合は、主人公の住むアパートが North Soho 地区にあり、ポストオフィスタワーのお膝元に位置する。また、彼の住むところは決して裕福な地域ではない。でも、主人公のブラッドリー・ピアソンにとっては、「相応しい」ところである。彼は彼のライバルでもあり友人でもあるアーノルド・バフィンの住む場所との差異を強く意識している。それは、劣等感とは別物の感覚である。ブラッドリーは今の彼の置かれた状況をことさら卑下することもない。ただ、彼の物語る ‘A Celebration of Love’ のストーリーからは、一言では語り尽くせない複雑なこころの動きが描かれる[2)]。

一方、マキューアンの場合は、このランドマークはロンドンを象徴するものからさらに敷衍され、作品の中で描かれる時代とほぼ同時代に起こった 9・11 同時多発テロが大きな影を落としている。それを象徴するのが、主人公ヘンリー・ペウロンが目にする翼付近から赤い炎を出してヒースロー空港の方角に飛び去る機影である。と同時にこれは、彼の平穏である週末の土曜日に起こる事件への暗示の役割も負っている。脳神経外科医のヘンリーは、１週間の仕事を終え土曜日の早朝に窓の外にこの機影を発見する。彼にとって土曜日は、新たな１週間を始める前の一息つくための週末の始まりでなければならない[3)]。

さて、近年の日本の状況に目を向けると、いわゆる町のランドマーク建設、塔あるいは高層ビルの建設は枚挙にいとまがない。その中でも一番のものは、東京タワーに代わる電波塔として建設された東京スカイツリーである。タワーの索具の一番高い場所までが地上 634 メートルを記録したことは記憶に新しい。

これまで電波塔の役割を担ってきた東京タワーは全長 333 メートルである。また、今年の３月には、大阪に新しい高層ビルあべのハルカスが正式にオープンした。これは、全長 300 メートルである。日本の首都に新しく建てられた東京スカイツリーは別格とするとしても、ロンドンのポストオフィスタワーは、索具を含めて 191 メートルである。その高さにおいては、東京タワーやあべのハルカスには及ばない。しかしながら、ロンドンの町のランドマークとして

の存在は大きいと考えられる。それを明らかにするためにも、今回私が比較しようとする2つの作品の中でのポストオフィスタワーの存在に注目したい。

第1章　*The Black Prince*（1973）の中のポストオフィスタワー

The Black Prince は、ブラッドリー・ピアソンという寡作の作家の物語である。ただし、作品の体裁は複雑で、この作品の中にもう一つの小説が存在し、その中には現実にブラッドリーと関わりをもつ人物がすべて登場していると思われるような構成になっている。それゆえ、読者はしばしば、今は現実の出来事であるのか、あるいは、ブラッドリーの描く虚構の世界であるのか、判断に迷うことになる。

今ここで、彼の作る虚構の世界である 'A Celebration of Love' の世界に足を踏み入れてみる。そこには、まさしくブラッドリー自身が彼を取り巻く状況の中でもがいている様が見える。彼は、税務署の職を辞し本格的な作家として、彼の理想とする主義にのっとった作品を書き上げようとする。彼はそのために、今生活の拠点としているポストオフィスタワーにほど近いアパートを出て、夏の間だけ海辺の別荘に移るところだ（*BP*, 18）。ここから、彼の身に降りかかる事件はことごとく、彼の計画の邪魔をする。まさに、彼の作品創作という行為が並大抵のものではないことを、読者に知らしめようとしているかのようである。

彼は多作の作家として世に認められているアーノルド・バフィンとは、逆のポリシーを掲げ、アーノルドは、ただ闇雲に作品を量産しているだけで、「待つ」ことのできない作家だと、批判する（*BP*, 146）。[4)]　ゆえに、ブラッドリーはひたすら「待つ」ことを続けるのだと言える。

ブラッドリーは、彼の「前書き」で記しているように、パタラという名の海辺の別荘を見つけていた。彼はそこへ移り創作活動に没頭する目的を持っていた（*BP*, 22）。

彼の義理の弟フランシスから突然の訪問を受け、かつての妻のクリスチャンが離婚してロンドンに舞い戻ることを知らされる。また、ライバルであり盟友のアーノルドからは、妻を殺したかもしれないというとんでもない知らせを受ける。さらに、夫の浮気に端を発したことが原因で夫婦仲が険悪になって、妹のプリシラが彼のアパートに転がりこんでくる。ブラッドリーのロンドンを離れるという計画は、こうして不可能となる。

ブラッドリーのパタラ行きが実現するのは、彼がアーノルドの娘ジュリアンと親しくなり、彼女を彼の愛、すなわち「エロース」の対象として強く意識するようになってからである。ジュリアンと共に行動するブラッドリーはきわめて滑稽で、また非現実的である。それは、これがブラッドリー自身の創作の中の世界であることを考慮すると、納得しやすい。例えば、彼はジュリアンとの年齢差を強く意識し、二人の関係が道義的に問題であるかのように考える一方で、できるだけ早急に二人が男女の関係を結ぶことを切望する。彼がジュリアンをパタラ行きに誘うのも、それが大きな要因と考えられるであろう。

妹のプリシラを巡っては、彼は女性たちから大きな助けを得る。プリシラは精神を病んでしまっているので、誰かが絶えず側にいて見守る必要がある。それを手伝ってくれたのが、アーノルドの妻のレイチェルと、彼の別れた妻のクリスチャンである。フランシスとアーノルドもブラッドリーを支えるが、彼女たちの力はそれ以上である。特にレイチェルとブラッドリーとは、男女の一線を越える関係となるが、後にブ

ラッドリーが獄中のひととなる原因がレイチェルにあったことを知った時、読者の意識は大きく混乱する。

また、物語 'A Celebration of Love' の後半のストーリーは、ブラッドリーとジュリアンの関係が中心となっていく。そして同時に、ポストオフィスタワーの存在が彼らの関係に何らかの意味付けをする。

そこでまずは、それらの箇所を引用しつつ、内容を吟味したい。

> I lived then and had long lived in a ground-floor flat in a small shabby pretty court of terrace houses in North Soho, not far from the Post Office Tower, an area of perpetual seedy brouhaha.
>
> (*BP*, 22)

ブラッドリーはロンドンの North Soho 地区の喧騒の中で暮らしている。ここには、かれの住むアパートの様子が描かれている。彼に取ってこの場所が重要であるのは、「古ぼけているがきれいな（shabby pretty）」庭の中で暮らしているということである。その側には、ポストオフィスタワーがそびえている。そのような環境であるにも関わらず、彼はしばらくロンドンを離れ海岸の別荘へ向かおうとしている。そうこうしているときに、ブラッドリーのこの計画を妨げることが次々と起こるのである。

ブラッドリーは、いつもポストオフィスタワーの監視のもとに置かれていたと言える。彼にとってそれは決して居心地の悪いものではない。むしろ、太陽光線のあたらない、居心地のよい場所である。

> It was the day after her exploit with the sleeping pills. The ambulance had taken her to the hospital from which she had been discharged on the same afternoon. She was brought back to my flat and went to bed. She was still in bed, in my bed, the time being about ten-thirty in the morning. The sun was shining. The Post Office Tower glittered with newly minted detail.
>
> (*BP*, 83)

彼の妹プリシラは、夫の浮気を契機に夫婦仲が険悪になり、物語の冒頭早々にブラッドリーのアパートにやって来る。そして彼女は、かなり精神を病んでいる。このことが、のちのちブラッドリーの人生に大きな影響を与えることになる。

この引用が描いているのは、彼女が自殺を図り病院に運ばれ、再びブラッドリーのアパートに戻ったところだ。前日の昼から翌日の朝遅い時間まで眠りっぱなしである。ブラッドリーは、そうした妹を腹立たしく思っている。そうしたブラッドリーを見降ろすポストオフィスタワーは、新しく取り付けられたタワーの「装飾」がギラギラと光を放っている。もちろん、それは朝の太陽光線を反射しているのだけれども、平然と眠るプリシラののんきさが強調されているような感じがする。彼女の置かれた深刻な状況をしばし忘れさせてくれるような場面である。

> We walked a few steps along the street and stopped beside a red telephone box. Julian now wore a rather jaunty boyish air. She was clearly feeling relieved too. Above her, behind her, I saw the Post Office Tower, and it was as if I myself were as high as the tower, so closely and so clearly could I see all its glittering

> silver details. I was tall and erect: so good was it for that moment to be outside the house, away from Priscilla's red eyes and duller hair, to be for a moment with someone who was young and good-looking and innocent and unspoilt and who had a future.
>
> (*BP*, 136)

ブラッドリーはジュリアンと町を歩いている。これは、彼が彼女の両親を訪ねた折に、彼女からシェイクスピアの『ハムレット』の講義を求められた[5]すぐ後の場面である。ここで、ブラッドリーは自殺未遂を図る妹と対照的な存在として、ジュリアンの存在をとらえている。物語の後半で彼は彼女の虜になるが、これはそれ以前の場面である。「若くて、顔立ちのいい、無垢な、精神を病んでいない（young and good-looking and innocent and unspoilt）」ジュリアンという捉え方には、後のブラッドリーと彼女との関係を暗示するが、ここではあくまでも、妹とジュリアンの「年齢」の差が彼の意識を支配しているのであろう。それはともかくとして、ここではポストオフィスタワーが、大きな役割を負っているようである。

ブラッドリーはジュリアンの背後にそびえ建つポストオフィスタワーに気が付く。そのとき彼は、彼自身がそのタワーのように、まるで巨人になったかのように感じている。タワーが直立して立つように、ブラッドリーはジュリアンの前に立っている。彼の眼には、目を覚まさない妹プリシラに不満を感じときに目にしたポストオフィスタワーの「装飾」が映る。今回は極めてはっきりとである。彼は、家の外に出て、つまり妹から離れていることが、如何に快適なことであるかを強く自覚するのである。

また、後のジュリアンの振る舞いを考えるための伏線として、彼女の服装が「男の子のようである（boyish air）」ことに注目しておく必要があるだろう。

> . . . I felt her weight and saw her face close to mine, leering and anarchic with emotion, unfamiliar and undefended and touching, and I relaxed and felt her body relax too, falling like heavy liquid into the interstices of my own, falling like honey. Her wet mouth travelled across my cheek and settled upon my mouth, like the celestial snail closing the great gate. As blackness fell for a moment I saw the Post Office Tower, haloed with a blue sky, aslant and looking in at the window.（This was impossible, actually, since the next house blocks any possible view of the tower.）
>
> (*BP*, 140)

ブラッドリーは、ジュリアンとの関係に「愛」すなわち「エロース」を見出し、その少女にのめり込む前に、その娘の母親でもあるレイチェルとの関係に「愛」を見つけ、それを育もうとしていた。それは、物語の始まりのエピソードの中のひとつでもあった。夫アーノルドから、彼女を殺害したという電話を受け、すぐさま彼の家に赴きそれが真実ではないことを発見するという事件である。このときの「殺人」は、あとになって、殺した人間と殺された人間が逆転するという事件の前触れのような意味合いをもつ。ブラッドリーは多分にこの事件のせいで、レイチェルの側に立つようになったのであろう。それが、いつしか男女の関係に発展していったのであろう。この場面は、かなり濃密な男女の愛の描写となっている。

この場面のポストオフィスタワーも、見方を変えると興味深い描写となっている。実際にはありえないのに、ブラッドリーは、まるで光輪を纏ったかのように、青空の中に浮かびあがるポストオフィスタワーの姿を目にする。彼の部屋の窓からは、隣家に視界を塞がれタワーの姿が見えるはずはないのである。ポストオフィスタワーが、ブラッドリーとの関係の何らかの暗示であると考えると、実際に見えないものが一瞬きわめてくっきりと見えるというのはどういうことであろうか。彼とレイチェルの関係は、彼とジュリアンとの関係が大きくなると自然消滅してしまう。この事態をポストオフィスタワーが、明快に暗示しているのであろう。

上述したのは、それぞれ異なる人物とポストオフィスタワーとが、ブラッドリーの眼前で共存する様を描写した箇所である。妹プリシラの前に現れるポストオフィスタワーは、彼女の内面とは裏腹で、「真新しい出来上がったばかりのタワーの装飾で（with newly minted detail）」光輝いている。バフィンの娘のジュリアンの前では、タワーがそびえたつだけでなく、ブラッドリー自身がタワーになったような感覚をもっている。さらに、ジュリアンの母親のレイチェルにあっては、一瞬闇が途切れてポストオフィスタワーが視界に入ったかに感じられる。しかしそれはブラッドリー自身が感じ取っているように、実際に起こりえないことなのである。

第２章　*Saturday*（2005）の中のポストオフィスタワー

Saturday は、早朝に目覚めた主人公が眠れないままに窓の外の光景を見る場面から始まる。脳神経外科医のヘンリー・ペウロンは、多忙な平日を終え今土曜日の早朝まだ夜が明けきっていない午前４時すぎに、ベッドから起き上がり窓の外を見ている。一週間を終えたばかりだというのに、妙に元気がみなぎっている。彼の部屋の外の公園には若いカップルが見える。また、そのあたりを夜勤の帰りと思しき看護師の姿が映る。

彼は特に何かをしようとしているのではない。彼は眠れないままに、ベッドから起き上がり窓の外を見ているだけである。彼は患者に施した手術のことなど、過ぎ去ったばかりの一週間を思い起こしながらも、これから始まる土曜日に思いを馳せる。これは、彼の住まいの近くにそびえるポストオフィスタワーのごとく、彼は上から世界を見下ろしているかのようである。彼の視界には、流星の光が入ってくる。しかしながら、次の瞬間には、彼はそれが流星ではなく航空機の機影であることに気が付く。それは、悲鳴のような音をたてて今まさにヒースロー空港に着陸しようとしている。

> . . . Of course, a comet is so distant it's bound to appear stationary. Horrified, he returns to his position by the window.
>
> . . . Only three or four seconds have passed since he saw this fire in the sky and changed his mind about it twice.
>
> . . . east to west, along the southern banks of the Themes, two thousand feet up, in the final approaches to Heathrow.
>
> . . . . .
>
> It's directly south of him now, barely a mile away, soon to pass into the topmost lattice of the bare plane trees, and then behind the Post Office Tower, at the level of the lowest microwave dishes. Despite the city lights, the contours of

the plane aren't visible in the early-morning darkness. The fire must be on the nearside wing where it joins the fuselage, or perhaps in one of the engines slung below. The leading edge of the fire is a flattened white sphere which trails away in a cone of yellow and red, less like a meteor or comet than an artist's lurid impression of one.

(*SA*, 14-5)

この引用箇所は、流星と思っていたものが、航空機であるとわかり、このままヒースロー空港に墜落炎上となるのではないかと、ペウロンが最悪の事態を想像しているところである。その一方で、その「場面」の中にポストオフィスタワーがすっぽりとおさまっている。そしてそれは、ペウロンの今いる場所と、航空機との距離感を示す役割を果たしているようにも見える。「それからポストオフィスタワーの一番低いパラボラアンテナの後ろを通ろうとしている（then behind the Post Office Tower, at the level of the lowest microwave dishes)」という描写からは、航空機がかなり低い位置まで降下していることをも示している。幸いこのロシア航空機は、エンジントラブルを起こしただけであった。

ペウロンには、妻と二人の子供がいる。娘のデイジーは文学の才を開花させ、近々一流の出版社から詩集を出版することになっている。ペウロンは、自分が文学教育を施されていると思いつつも、娘が推薦してくる本を読んでいる。そもそもデイジーに文学教育を施したのは、妻の父親のグラマティカスである。しかし、プロの詩人であるグラマティカスも、今では孫娘がライバルのような存在である。息子のシーオは、ブルースミュージシャンとして、今一歩ずつプロフェッショナルへの道を進んでいる。かつてペウロンは、幼い息子にエリック・クラプトンを聞かせたことがある。それ以降、息子は音楽に興味をもち、今があるとペウロンは考えている。妻のロザリンドとは、彼が研修医であったときに出会った。彼女は、急に目の前のものが見えなくなり、彼のいる病院で診察を受けた。彼女は、下垂体にできた腫瘍の切除手術を受け、ペロウンは彼女の抜糸の手伝いをした。これが二人を結びつけることになった。こうした家族と、義父グラマティカスが一堂に会したとき、事件が起こる。ペロウンに恨みを持つ男が、彼の家に侵入した。

仕事のない土曜日、ペウロンは同僚とスカッシュをするために車を走らせる。その日は大通りでデモ行進があり、いつもの道を使うことが出来ず迂回することになった。彼が目的の道に乗り入れようとしたちょうどそのとき、もう一台別は車が同じスペースに入り込もうとして、彼の車とその車とが接触した。これが、この物語の中の「事件」である。相手の車には 3 人の男が乗っており、その中の助手席の背の低い男がクレームをつけに来た。バクスターという名のその男は、金を要求してきた。医師であるペウロンは、その男が難病を患っていることを見て取る。ペウロンは、隙を見てその場から立ち去った。バクスターはこのことに大変憤りを感じ、のちにペウロンの家に侵入する。

スカッシュに向かう途中に、ペウロンはポストオフィスタワーの基盤となるビルの前を通過する。

In a spirit of aggressive celebration of the times, Perowne swings the Mercedes east into Maple Street. His wellbeing appears to need special entities to oppose it, figures of his own invention whom

he can defeat. He's sometimes like this before a game. He doesn't particularly like himself in this frame, but the second-by-second wash of his thoughts is only partially his to control – the drift, the white noise of solitary thought is driven by his emotional state. Perhaps he isn't really happy at all, he's psyching himself up. He's passing by the building at the foot of the Post Office Tower – less ugly these days with its aluminium entrance, blue cladding and geometric masses of windows and ventilation grilles looking like a Mondrian.

(*SA*, 78)

これは彼が車の接触事故を起こす直前の箇所である。彼がトラブルを起こす少し前に彼の視界はポストオフィスタワーを捉えている。まるで、彼の意識の中にはいつもタワーが存在しているようである。

ペウロンが接触した車に乗っていたバクスターという男は、彼の家族がそろっているところに刃物を持ち押し入る。彼は、ペウロンから病気を指摘されそのことを快く思っていないせいもあり、ペウロンの一家を傷つけようともくろむ。この事件の顛末は、ペウロンが息子のシーオと協力することで終わる。二人の体当たりを受け、バクスターは階段から落下しけがをして意識をなくす。ハンチントン病[6)]という病名に気付いたペウロンは、彼を自分の勤務する病院に運ぶ。さらに、ペウロンはこの賊の執刀医にもなる。この賊への恨みを感じる家族と同様、手術を行うペウロンは手術にかこつけてバクスターの命を絶つことも可能だという思いにとらわれるが、命を救うことでこれからもこの男にハンチントン病と闘う人生を与えるという、一種の復讐を行う結果となる。

バクスターの侵入事件から一夜明けた朝、ペウロンは彼の手術を執刀する医師として、病院に向かうその時も彼の傍らにはポストオフィスタワーが存在している（*BP*, 241）。

第３章　『ハムレット』を媒介とする、ジュリアンとポストオフィスタワー

ブラッドリーは、ジュリアンとポストオフィスタワーの 34 階展望フロアにあるレストランで食事をする。「ポストオフィスタワーの上のレストランは、とてもゆっくりと回転する（*BP*, 238）」と、ブラッドリーは述べる[7)]。これは、のちのパタラ行きに繋がる二人の密会である。ブラッドリーとジュリアンとの関係で一つ大きな仕掛けとなるのは、シェイクスピアの『ハムレット』である。ジュリアンがブラッドリーに急接近をするのもすべて、ブラッドリーから『ハムレット』の講義を聞くためである。しかしながら、ブラッドリーはジュリアンの要求に真面目に答えていないように感じる。一方、ブラッドリーの心の中は複雑である。

. . . The presence of the loved one is perhaps always accompanied by anxiety. Mortals must tremble, where angels might enjoy. But this one grain of darkness cannot be accounted a blemish. It graces the present moment with a kind of violence which makes an ecstasy of time.

To speak more crudely, what I experienced that evening on the Post Office Tower was a kind of blinding joy.

(*BP*, 238)

ポストオフィスタワーのレストランで、ジュリアンと向かい合うブラッドリーは、何か得体のしれない喜びを感じる。タワーの 34 階展望フロアにあるレストランは、ゆっくりと動いている。ジュリアンの顔を見ながら、ブラッドリーは今彼のいる町ロンドンの存在を強く感じている。彼はまるでピンで壁に止められているかのような感覚の中、「この上なく素晴らしいあの喜び（a kind of blinding joy）」が彼を覆う（*BP*, 238）。ブラッドリーはかつて二人で歩いたとき感じた「タワーのように背が高くなっているかのような（as if I myself were as high as the tower）」地上高くにいる自分を、でもジュリアンの前にいるときは「恍惚感（an ecstasy of time）」を感じながら、地上と繋がっている自分を強く意識する。

ジュリアンと彼の物語はこの後、『ハムレット』を媒介とした繋がりを維持しながら展開する。ジュリアンはまるで喪に服するハムレットのように、如何にも若い男性然とした黒い服を身に纏う。パタラでは、ブラッドリーがジュリアンとの間に男女の関係を結ぶことが目的になる。ところが、その思いを遂げたのもつかの間、彼の逃避行は娘を追いかけてきた彼女の両親の出現で幕を閉じる。ジュリアンを失ったブラッドリーに、再び物語の冒頭の場面が訪れる。しかしながら、今回は殺したのがレイチェルで、殺されたのはアーノルドである。物語の冒頭の「事件」は全く逆の結果をもたらす。ブラッドリーは、レイチェルの代わりにアーノルド殺しの犯人となり、獄中のひととなる。作中の作品 ‘A Celebration of Love’ のあとに、4 人の登場人物による後書きが続く。さらに、編集者のロクシャスは、彼の後書きでブラッドリーをかばい、4 人の人物が決して本当のことを述べているのではないと、読者に教える。

ところで、『ハムレット』を媒介としたジュリアンとの関係で、ブラッドリーはフロイドの精神分析学的は解釈をジュリアンに紹介して、ジュリアンを煙に巻こうとしている場面がある。精神分析学的な『ハムレット』解釈は、義理の弟のフランシス・マーロウの、ブラッドリーの内面分析に繋がっていく。フランシスは、ブラッドリーがポストオフィスタワーに囚われていると、告げる。この点については、多くの先行研究において、タワーを男性自身に例える解釈がなされている。さらには、作家としての成功の象徴と説く批評家もいる[8)]。

結論　2 つの作品の中のポストオフィスタワー

本稿で、私はポストオフィスタワーをキーワードにアイリス・マードックの *The Black Prince*（1973）とイアン・マキューアンの *Saturday*（2005）とを比較分析してきた。

The Black Prince の場合は、登場人物に寄り添うように彼らの住まいの近くで、また彼らの内面を象徴するものとして、ポストオフィスタワーは登場していた。ときに、ブラッドリーは、自分自身がそびえるタワーのように、周りの目の前にあるものを見下ろすように、また見守るように感じていた。

ブラッドリーのロンドンからの脱出、すなわち海辺の別荘パタラ行きは、紆余曲折あったが、アーノルドの娘ジュリアンと実行に移すことになる。パタラに着いた後、ブラッドリーは彼が思い描いていたようには、決して彼の作品が進まないことを思い知らされる。彼はジュリアンとの関係に溺れるのみである。先行する研究でしばしば指摘されるように[9)]、それは彼が「黒いエロース」の虜になったせいであろう。これは、作品のタイトルにある black と重なり合うところである。また、ジュリアンが黒いコス

チュームでハムレット然とするところもそうである。ブラッドリーは、ジュリアンとの年齢の差を意識し、年齢を偽っていることに思い悩み、ジュリアンとの関係の中で、うまく最後の一線を越えることが出来るのかと思い悩む。それは、ちょうど彼が、彼の作品を完成させるために苦しみにおしひしがれるさまと類似している。

ジュリアンとのパタラへの逃避行は、彼女の両親に居場所を突き止められ、その母に説得されたジュリアンが彼の元から姿を消すことによりあえなく終わりを告げる。また、妹プリシラの自殺もあった。彼は、この時点でも、何かの芸術的な達成を成し遂げたわけではない。それとは全く逆に、彼は殺人の罪を負わされ牢に入れられ、と同時に不治の癌が見つかりあえなく命を落としてしまう。

その後、彼の描く ‘A Celebration of Love’ を読み進めてきた読者は、彼とかかわりを持つ人物たちの「後書き」を読み、その後の経緯を推測する。ブラッドリーの描くこの ‘A Celebration of Love’ の中で命を落としたのは、彼のライバル作家のアーノルドであった。物語の最初に読者を緊張に導いたアーノルドの言葉は、人物こそ違え現実の出来事となる。殺されたのはアーノルドの方であって、レイチェルではなかった。

ここで再び、物語の前半で描かれていたことを回想すると、ブラッドリーがいつも不運に見舞われていたことが分かる。それは彼のパタラ行きの邪魔をするフランシスの訪問、アーノルドからの電話、そして妹プリシラの不幸な結婚の顛末である。特に最後のものは、プリシラの精神を犯し、自殺への導くものであった。一方、彼は女性の登場人物との、いわゆる「愛」に基づく男女の関係を求めていたように感じられる。ブラッドリーは一度結婚に失敗している。物語の中には、別れた妻クリスチャンが、その弟のフランシスを仲立ちとして彼の前に現れる。このことは、少なからず彼の行動すなわち芸術作品の完成への障害となっていた。しかしながら、その他の女性たちは、彼を一時的にせよ、慰めを与えてくれたようである。彼は、妹プリシラの不幸に同情しつつも、彼の芸術への追及はやむことはない。レイチェルとジュリアンが、彼の愛、すなわち「エロース」の対象となった。ただし、彼のこうした女性に求める「エロース」は、ときに高次なものとなる一方、ときに低次元に世俗的になる。

一方、*Saturday*（2005）では、ロンドンを象徴するランドマークであるという共通点を持ちながらも、異なった役割を負わされていたのではなかっただろうか。あの世界を恐怖に陥れた 9・11 同時多発テロの記憶が未だ冷めやらぬ 17 か月後のロンドンが舞台である。2002 年 2 月のとある日の出来事である。リン・ウェルズが述べているように、読者はこのポストオフィスタワーを、ニュー・ヨークの世界貿易センタービルに擬えることもできるであろう。それを示すかのように、主人公のヘンリー・ペウロンは夜明け前の空に炎のような赤い色を放つ機影を見て、瞬時に 9・11 同時多発テロと同様の深刻なテロを疑う。ここでは、タワーは人物の内面を象徴するというよりも、テロの標的となる大都市の象徴としてそびえたっている。もちろん、ロンドンに住む人々を見下ろす存在であることは疑いない。ペウロンは、タワーのすぐそばで、例え親子の間に気持ちの多少の行き違いがあるにせよ、幸せな家族を作り生活をしている。その家族の絆は、バクスターのような賊が侵入しても簡単には壊れない。ポストオフィスタワーは、彼と彼の家族を見守っている。しかしながら、彼の意識の中では、世界がアメリカを中心にイラクに報復攻撃を行おうとする時代背景が色濃く反映していた。タワーの高さは、ひょっ

としてハイジャックされているかもしれない機影の高さを、またそこまでの直線距離を意識させる「尺度」のように、彼の心に写し出される。

付記

本稿は、第 16 回日本アイリス・マードック学会 [於：京都文教大学、2014 年 10 月 25 日（土）] にて発表したものを、加筆修正したものである。

註釈

本稿での作品への言及は、*The Black Prince*（1973）は *BP* と、*Saturday*（2005）は *SA* と略記する。また、合わせて引用箇所のページ番号を記す。

1）アン・ロウ[Rowe, Anne. "'Policemen in a Search Team': Iris Murdoch's *The Black Prince* and Ian McEwan's *Atonement*" in Anne Rowe ed. *Iris Murdoch A Reassesment* (New York: PALGRAVE MACMILLAN, 2007) 152] は、マードックの *The Black Prince* をマキューアンの作品と比較しているが、それは *Atonemant*（2001）である。ただし、ロウは、そこに 9・11 同時多発テロという事象を介在させ、二つの作品の比較を試みている。さらにロウは、ポストオフィスタワーが科学と技術の結びつきの象徴となっていると指摘している。私は、彼女がポストオフィスタワーに着目しているところに強くひかれた。*The Black Prince* が創作された 1970 年代はイギリス国内でしばしば IRA によるテロがあり、*Saturday* が創作された 2000 年代は、世界を震撼させた 9・11 同時多発テロが 2001 年 9 月 11 日に起こった。ロウはまた、こうした 2 つの異なる時代をテロをキーワードにして結びつける。また、ドミニック・ヘッド [Head, Dominic. *Ian McEwan* (Manchester: MUP, 2007) 195] は、*Saturday* についての論考の中で、マキューアンのこの作品の中にマードック的な要素が盛り込まれていることを指摘している。それは、逆説の利用や偶発性を伴うストーリー展開においてである。主人公のペウロンが、最後に彼の家に侵入したバクスターの命を救うことのなる経緯を描く箇所である。彼の家族を恐怖に陥れた男の命を亡きものにするか救うかの選択があり、さらに救う場合であっても難病を抱える男に生きて苦難を負わせ続けるという結果となる。ポストオフィスタワーは、往々にしてフロイドの精神分析的な観点から、ペニスの象徴と解釈されることが多い。わたしはそれを否定するつもりはないが、タワーはその時々のブラッドリーの内面の反映と考えたい。

2）ピーター・コンラディ [Conradi, Peter J. "Oedipus, Peter Pan and Negative Capability: On Writing Iris Murdoch's Life" in Anne Rowe ed. *Iris Murdoch A Reassesment* (New York: PALGRAVE MACMILLAN, 2007) 192] は、ブラッドリーの住む世界は、現実もブラッドリーの創る虚構の世界も、彼の行動を妨げるものであると言う。いや、*The Black Prince*（1973）の読者の見ているのは、元々ブラッドリーの創る虚構の世界そのものなのかもしれない。そして、その世界では、ジュリアン・バフィンの存在が大きく、またコンラディの指摘するように、その背後には合わせて、彼女の母親のレイチェルの存在が垣間見える。それは、最終的に彼女が夫アーノルドを殺害することへの伏線ともなっている。

3）リン・ウェルズ [Wells, Lynn. *Ian McEwan* (New York: PALGRAVE MACMILLAN, 2010) 114] は、ポストオフィスタワーが、現代のロンドンに巣くう暴力を象徴していると述べている。また、ガラス窓で取り囲まれた円錐上の形状は、9・11 同時多発テロの標的となったワールドトレードセンタービルの窓ガラスを暗示させ、それと同時に、ロンドンが核兵器の攻撃を受けた際のシェルターとなるべき願いが込めれていると説明する。タワーの設計に際しては、広島の原爆ドームの形状をまねることにより、核戦争を生き残るようにとの願いが込められたと言う。

4）エリザベス・ディップル [Dipple, Elizabeth. *Iris Murdoch Work for the Spirit* (Chicago: UCP, 1982) 113] は、往々にして、次々と作品を量産できる一流の作家にとって必要なことは、「待つこと」であると、ブラッドリーの主義に触れる。それは、芸術とは現実生活の中にただ単に存在するものとは異なるのだ、という理屈に聞こえる。しかしながら、そこには「提示された物語とは、その一番真実に近い形の中にある芸術の

ことである」という芸術の神アポロンの姿を修正したものであるとの見方が見られる。その反面、このアポロン的な真実は、ブラッドリーの考える独自な考え方を取るに足りないものとしていると指摘する。

5）ブラン・ニコル [Nicol, Bran. *Iris Murdoch The Restropective Fiction* (New York: PALGRAVE MACMILLAN, 2004) 106] は、ブラッドリーが行ったアーノルドの新作への批評は、自身の作家としての不作への言い訳と彼の持論を織り交ぜた「悪意に満ちた」ものであると指摘する。また、彼の『ハムレット』批評は、古典的なフロイドの精神分析的な手法を用いたもので、「的を得ているけれども、狭い解釈ゆえに複雑な『ハムレット』の作品批評になり得ていない」と述べている。一方で、この方法は、“A Celebration of Love” の中の義理の弟フランシスがブラッドリーを批評する際にも用いられる。つまりは、表裏一体の関係であると指摘する。

6）ハンチントン病とは、常染色体優性遺伝型式を示す遺伝性の神経変性疾患で、舞踊運動などの不随意運動、精神症状、行動異常、認知障害などを特徴とする。これらの症状はいつのまにか始まり、ゆっくり進行する。これらの症状は、脳の特定の部分である大脳基底核や大脳皮質が委縮してしまうために生じる。（難病情報センター Japan Intractable Diseases Information Center のホームページ http://www.nanbyou.or.jp による）

7）ピーター・コンラディ [Conradi, Peter J. *A Study of the Fiction of Iris Murdoch The Saint and the Artist Murdoch* (London: HarperCollinsPublishers, 2nd ed. 1989) 248-261] は述べている。*The Black Prince* も『ハムレット』も、フロイドの精神分析的な読みを要求するが、それだけでは不十分である。*The Black Prince* の中のポストオフィスタワーは男性を象徴するが、プラトン主義的なエロース、すなわち真善美への憧れをも具現化している。ブラッドリーはいつも、最も嫌う偶発事件によって「計画」を妨げられる。それらは、アーノルドからの電話、妹プリシラの夫婦関係の破綻、そして、最大の偶発事件は、彼の作品執筆がままならないことである。その一端は、彼の作家としての信条に起因しているところが大である。一方で、彼の心の慰めを与える存在がある。彼のライバルの作家アーノルドの妻レイチェルと娘のジュリアンである。ブラッドリーはレイチェルに男女の関係を見出し、さらにジュリアンとは道ならぬ関係を持つ。彼はジュリアンと、ポストオフィスタワーの最上階のレストランで食事をする。それについて、コンラディは、ブラッドリーは天使から語りかけられているような気持ちになれたと指摘する。

8）ボウヴとロウの二人の筆者 [Bove, Cheryl K. and Anne Rowe. *Secred Space, Beloved City: Iris Murdoch's London* (Cambrige: Cambridge Scholars Publishing, 2008) 62-4] は、マードックの「企み」を指摘する。マードックは、ポストオフィスタワーという針のように上に伸びるランドマークにフロイドの精神分析学的な解釈を当てはめることで、精神分析学的な解釈を揶揄している。例えば、フランシスはブラッドリーがポストオフィスタワーに取りつかれていると言う。フランシスは、ポストオフィスタワーの姿が、ブラッドリーの歪んだ恐怖に彩られた女性の見方を正当化し、それはまた、ブラッドリーには壊れやすい男らしさが備わっていることを示すことにもなっていると指摘する。一方で、ボウヴとロウは、ポストオフィスタワーは彼の希望である、善き作家となり偉大な作品を創り上げたいとする痛々しいまでの野心の象徴でもあると述べる。

9）7の註釈で言及しているピーター・コンラディ [Conradi, Peter J. *A Study of the Fiction of Iris Murdoch The Saint and the Artist Murdoch* (London: HarperCollinsPublishers, 2nd ed. 1989)] の論考がそうした批評の代表といえる。

参考文献（批評、その他）

Bove, Cheryl K., and Anne Rowe. *Sacred Space, Beloved City: Iris Murdoch's London*. Cambridge Scholars Publishing, 2008.

Childs, Peter, ed. *The Fiction of Ian McEwan A reader's guide to essential criticism*. PALGRAVE MACMILLAN, 2006.

Conradi, Peter J. *The Saint and the Artist A Study of the Fiction of Iris Murdoch*. 1986. Macmillan Press: HarperCollinsPublishers, 2001.

Dipple, Elizabeth. *IRIS MURDOCH Work for the Spirit*. The Univ. of Chicago Press, 1982.

Groes, Sebastian, ed. *IAN McEWAN*. Continuum International Publishing Group, 2009.

Head, Dominic. *IAN McEWAN*. Manchester University Press, 2007.

Nicol, Bran. *Iris Murdoch: The Retrospective Fiction*. 2nd ed. PALGRAVE MACMILLAN, 2004.

Purton, Valerie. *An Iris Murdoch Chronology*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.

Rowe, Anne ed. *Iris Murdoch A Reassessment*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.

Spear, Hilda D. *Iris Murdoch*. 2nd ed. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.

Wells, Lynn. *Ian McEwan*. PALGRAVE MACMILLAN, 2010.

日本アイリス・マードック学会 [編].『Iris Murdoch 全作品ガイド　アイリス・マードックを読む』. 彩流社, 2008.

ボウヴ, シェリル･K[著]　山本長一 [訳]『アイリス・マードック読解』. 彩流社, 2008.

マキューアン, イアン [著]　小山太一 [訳]『土曜日』. 新潮社, 2007.

室谷 洋三.『アイリス・マードック「黒衣の王子」論 ―「藪の中」の系譜 ―』. 英潮社新社, 1988.

http://en.wikipedia.org/wiki/BT_Tower

http://www.dailymail.co.uk/news/article-1224488/Revolving-restaurant-BR-Tower-reopen-30-years-html

http://www.theguardian.com/culture/2001/nov/10/artsfeatures1

http://www.urban75.org/blog/bt-telecom-tower-restaurant-plans-abandoned/

使用テキスト

McEwan, Ian. *Saturday*. Vintage, 2006.

Murdoch, Iris. *The Black Prince*. Vintage, 1999.

Abstract

The Post Office Tower in Two British Novels: Iris Murdoch's *The Black Prince* (1973) and Ian McEwan's *Saturday* (2005)

Yasushi NAKAKUBO

This paper examines Iris Murdoch's *The Black Prince and* Ian McEwan's *Saturday*.

Murdoch composes her 15th novel as a metaphysical fiction. She portrays her hero by means of the Post Office Tower. Bradley Pearson struggles to compose a 'real' novel with the title of 'A Celebration of Love.' On the other, McEwan illustrates *Saturday* reflecting the aftermath of "September 11 2001 attacks." His hero suspects that some attack from a terrorist has happened seeing an airplane flying towards Heathrow Airport with its engine firing. As the story opens, Murdoch's hero is about to make a temporary leave from his house at the foot of the Tower. Unfortunately, something prevents him from leaving home whenever he goes out. McEwan's hero is a veteran neurosurgeon. He looks out of the window of his house near the Tower. There are a couple of medical workers leaving their hospital before dawn. He looks like a tower.

There is a similarity between these two novels. Each hero lives in London. Each of them keeps the Tower like a double in their neighborhood. The landmark seems to show what heroes think about in their stories.

In *The Black Prince*, the Tower glittering against the sunshine looks inside the window of Bradley's house, while his sister, who has attempted to commit suicide in vain, sleeps peacefully. Our hero thinks his sister is a poor girl, although Priscilla must be a trouble maker. The Tower plays an important role again. Bradley Pearson falls in love with his admirer. Julian Baffin, a daughter of Arnold and Rachel Baffin, dresses in black and asks Bradley to give a lecture of Shakespeare's *Hamlet*. He struggles in vain to build a relationship with his admirer for 'Eros.' There is a restaurant on the 34th floor of the Tower where Bradley invites Julian to dinner.

In *Saturday*, there is a serious happening to our hero. Henry Perowne goes out for a squash with his colleague. Something unknown drives him to meet a bad guy. There is a big march against a military attack on Iraq. He makes a detour and collides with a burglar's car. Perowne's medical knowledge lets him to notice how seriously the guy suffers from Huntington Disease. His behavior gets Baxter angry. The burglar thrusts his way into Perowne's house. It is fortunate that he falls down from the steps because of both Perowne and his son's attack. There is a final choice of our hero. He finds it possible to kill Baxter as a chief surgeon. The final paradoxical decision is, Baxter suffers from HD as long as he lives. In the morning when

Perowne goes to his hospital for Baxter's operation, the Tower looks down from its height.

Key Words : the Tower (the Post Office Tower), landmark, London